

よろずは

平成二七年
四月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

記紀万葉の故地 11

記紀万葉の故地8〜10では、飛鳥・藤原の都から、紀路をとり、紀ノ川に沿って、加太まで至る道筋の万葉歌を紹介しました。駅路はそのまま淡路へと向かいますが、行幸路は、加太まで行かずに和歌山市を南下します。そうしてたどり着くのが、和歌の浦です。和歌の浦には、つぎの著名な歌が伝わっています。

若の浦に 潮満ち来れば

潟かたを無み 葦あし辺へをさして 鶴たづ鳴き渡る

(訳文)和歌の浦に潮が満ちて来ると潟がなくなるので、葦のほ

とりを目ざして鶴が鳴き渡ることよ。(巻第六の九一九番歌)

724年の聖武天皇の行幸時に、山部赤人が詠んだ歌です。この歌は、よく単独で秀歌として紹介されますが、本来は長歌(九一七番歌)に添えられている反歌という位置づけです。つまり、この歌だけみても、あまり意味はわからないのです。玉津島の景観をほめたたえる長歌があつてこそ、この短歌は生きてきます。ぜひ長歌も合わせてよんでみてください。そうすれば、この歌がより魅力的に感じるかもしれません。【万葉古代学係】



てんぐ
箕供山からの眺望

正面の海は干潟。右の片男波公園かたおなみには万葉館もある。

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。